

自生の洞

セ
ン
ナ
。
ヨ
オ
コ

刈り込まれたしだをまとう

屍衣の白明

に兆の棘が

明日に突きささる

白昼 夢のない

しなやかな聖衣の

母体に咲きほこる

地衣類

の悪意に充ちた洞窟

母とそして胎の

明けに

細針 又は露がしたたる

あの恍惚

のような

あの失念

の

ような

非常な

明るさが

過ぎ

慥える羊齒植物が

根をひろげ

地中深く

腕

或いは

股を這い広げ

洞は

完璧な充実を有し

やがて連なる破爆の

時を待つ

裂ける瞬間とは

見知らぬ

森林地帯の奥にある

湿地層に生まれ

そして破爆するものとは

かつて 生まれ得る

力を

どのように蓄え処理され

たものであろうか

神殿に捧げられた供物の

ように

淫らに紅く燃える

生の魂

ひとつの予感もなく

屍衣まとう夜

洞はひっそりと

その姿を

喪ってしまふ